

## 第5章 初期コミンテルン大会の中国代表

石川禎浩

### はじめに

1920年代初頭に世界各国に誕生した“共産党”は、いずれもコミンテルン（共産主義インターナショナル）の各国支部と位置づけられていた。1920年のコミンテルン第2回大会で採択された「共産主義インターナショナルへの加入条件」, いわゆる“21カ条の条件”がその第17条で、「共産主義インターナショナルに所属することを希望する各党は、これこれの国の共産党（第三共産主義インターナショナル支部）という名称をつけなければならない。党名の問題は、たんなる形式上の問題ではなくて、きわめて重要な政治問題である」<sup>1)</sup>（強調ママ）と規定したことによって、“共産党”なる名称は、名目的には、コミンテルンの組織でなければ使えない一種の排他的名称となり、かつまた自動的にそれがコミンテルン支部と同一物であるという規定を受けることになった。つまり、世界のしかじかの国でいくら優れた共産主義者が組織を結成し、それに“共産党”という名称を冠しても、それだけでは“共産党”たり得なくなったのである。

事情は中国においても同様であって、「中国共産党」なる名称が初めて現れたのは、実は辛亥革命直後の1912年にさかのぼる<sup>2)</sup>のだが、今日これをもって中国共産党の創始と考える者はいない。中国共産党は1920年代の初頭に結成されたと、我々が考えているのは、前述の加入条件にあてはまるもの、つまりコミンテルン所属の組織にして初めて共産党なのだ、という通念に従っているわけである。この一事のみでも明らかのように、各国の共産党の歴史はコミンテルンと不可分の関係にあり、さらに中国の場合は、コミンテルンにとって

の中国がその革命理論の主要な実験場となったため、中国共産党（以下、適宜「中共」と略称）が被った影響は、実に多大であった。その影響は、中共の活動の進展がしばしばコミンテルンとの協調体制が密だった時よりも、むしろそうでなかった時に著しかったように、必ずしもプラスのものばかりだったとは言えないが、コミンテルンを抜きにしては、1920年代以降の中国革命史を記述できないほど、その存在が巨大だったことだけは確かである。かかる両者の関係の緊密さゆえ、コミンテルンと中国革命の関係史は、コミンテルン支部時代の中共においても関心を持たれたし、また、それと並行して国外の研究者によっても、中国革命史研究の中心的課題のひとつとして、精力的に研究されてきた。

中国においては、人民共和国成立後の中ソ蜜月とその後の対立という国際環境の激変と中国における党史の「禁区」化にともない、1950年代から60年代初に主に中国革命へのコミンテルンの貢献のみを記した党史が、その後一転して「長期にわたって……コミンテルンと中国革命の問題は、事実上研究を進めることができなかった」<sup>3)</sup>と評される時代を迎えることになった。こうした閉塞状況は、よく知られているように、1978年暮れの中共11期3中全会以降の改革・開放路線定着の中で大きく変化し、向青氏の意欲的な一連の研究<sup>4)</sup>を皮切りとして、コミンテルンの功罪を全面的に見直す研究成果が次々に刊行された。さらに、ソ連解体後のアルヒーフ公開の一環として、中国革命とコミンテルン、ソヴィエト・ロシアの関係にかんする資料集が1990年代に刊行されると、それらを利用した研究が一挙に活性化し、爾来、中国革命とコミンテルンを主題とする研究は、枚挙にいとまのない盛況ぶりが続いている<sup>5)</sup>。ただし、原資料主義が幅を利かすやに見えるこの方面の研究も、一皮むけば、基本的史実の解明を素通りした高踏的コミンテルン批判——中国革命に対するコミンテルンの指導の成敗評定——に陥っている観がある。

一方、国外にあっては、各国の社会運動とコミンテルンの関係史研究は、第二次世界大戦後に盛んに行われたものの、冷戦体制の終結と表裏をなして捨ておかれる傾向を示した。もっとも、ソ連解体に伴うアルヒーフ公開後には、欧米の研究者を中心に、各国共産主義運動の見直しが着実になされているが、こと日本においては、中国革命史をコミンテルン・アルヒーフを用いて再検討

しようという機運は、残念ながら、なお低調と言わざるを得ない<sup>6)</sup>。例えば、初期のコミンテルン大会に参加した人物（あるいは党派）の特定という基本的史実の解明は、かつてはどの国の社会運動史研究においても、欠かすことのできない、いわば基礎研究であった<sup>7)</sup>が、長らく資料不足の壁の前にそれが充分には進展せぬまま時が流れ、文書の公開によってようやくその資料不足が解消されるや、皮肉なことに、今度はその基礎研究をやる者も、それをやろうする空気も、もはや日本には残っていないといったありさまなのである。

こうした事情は、表面的にコミンテルン史研究が盛行する中国においても通底している。すなわち、近年漢訳された公刊のコミンテルン資料集に依拠する研究はあれこれあるものの、膨大なコミンテルン文書に比すれば九牛の一毛にすぎないそれら資料集に答えの書かれていない問題、例えばコミンテルン各大会の中国代表の確定という問題は、なお見るべき確答を得ていないのである。中国共産党も、自党の歴次大会の期日や参加者については、おりにふれて党史の中である種の公式見解を提示しているが、コミンテルン大会に派遣された中国代表団の構成については、不思議なことに、きわめて簡単な言及をするのみである<sup>8)</sup>。そこで、本章では、近年マイクロ・フィッシュの形で容易に見られるようになったコミンテルン大会の関連文書群 (*Comintern Archive, 1917-1940; Congresses, microfiches, Leiden: IDC Publishers, 1994*) に収録された原資料、およびロシア国立社会・政治史アルヒーフ (Российский государственный архив социально-политической истории [РГАСПИ]) 所蔵の資料などを用いて、1919年のコミンテルン第1回大会から1922年の第4回大会までの中国代表問題を検討し、この問題に決着をつけることにする。

第4回大会までに時期を限定したのは、主として以下の二つの理由による。すなわち、従来、中共が初めて正式代表を出席させた大会と言われてきた第3回大会は、本章で明らかにするような錯綜した代表参加経緯のために、終始一貫した正式代表が参加した大会とは言い難く、むしろ第4回大会こそが、中共とコミンテルンの公式関係の出発点にあたると思われること、そして、いまひとつは、第5回大会以降の中国(中共)代表の顔ぶれは、これまでの研究により、第8回プレナム(1927年)を除けば、ほぼ確定しているからである<sup>9)</sup>。

## 1 第1回大会

十月革命につづく内戦、干渉戦争がまだ激しかった1919年3月、コミンテルン創設のための世界大会がロシア共産党（ボ）の主導により、モスクワで開催された。この大会に先だって、同年1月にロシア共産党など8カ国の共産党・社会主義政党の名義で発せられた呼びかけ「共産主義インターナショナル第1回大会のために」<sup>10)</sup>は、世界の39の党・グループに、この記念すべき大会に参加するよう呼びかけていた。この中には中国の党、あるいはグループは含まれていなかったが、第1回大会には、評議権を持つ資格の2名の中国代表が出席したことが確認されている。劉紹周（Lao-Siu-Dschau, Лай-Сиу-Джай, 劉沢榮, 1892-1970）と張永奎（Tschan-Gun-Kug, Чжан-Юн-Куи, 1893-1977）の2人である<sup>11)</sup>。劉はレーニンの接見を受け、大会で発言もしている<sup>12)</sup>。かれらは、「中国社会主義労働党」（Chinesische Sozialistische Arbeiterpartei; Китайск. соц. раб. партия）の代表という肩書をもっていたが、それは中国本土の組織ではなかった。かれらはロシア在住の居留民で、「中国社会主義労働党」は、大会に参加するために作られた、いわば紙の上の組織であった。

この2人の経歴、およびかれらが「中国社会主義労働党」なる組織の代表としてこの第1回大会に列席した経緯については、すでに、李玉貞女史をはじめとする原文書にもとづく中国の研究によってほぼ明らかにされており<sup>13)</sup>、ここで改めてくり返すまでもあるまい。ごくかいつまんで言えば、「中国社会主義労働党」とは、当時ロシア領内に暮らしていた中国人居留民が十月革命後に組織した互助団体「旅俄華工聯合会」（Союз Китайских Рабочих в России, 1918年12月に、それ以前にペトログラードで成立していた「中華旅俄聯合会」を改組して、モスクワで成立、会長は劉紹周）であり、いわばかれらは在露中国人居留民のうちの指導層（劉、張はともに中等、高等教育をロシアで受けている）であった。それゆえに、第1回大会で各国の代表に言及した資格審査委員のチチェーリンは、かれらを「ロシアに住んでいる中国人労働者の移住者グループ」<sup>14)</sup>と呼んだのである。

## 2 第2回大会

劉紹周らのグループ「旅俄華工聯合会」はその後、活動規模を拡大、1920年6月25日には同会内に「ロシア共産党(ボ)中国人共産主義者中央組織ビューロー」(Центральное Организационное Бюро Китайских Коммунистов при РКП(б), 漢語名称: 俄国共産華員局)を設けて(7月1日にロシア共産党中央委員会が承認)、事実上の党組織に衣替えし、7月に開催されたコミンテルン第2回大会に、今度は「中国労働党中央ビューロー」(Zentralbureau der Chinesischen Arbeiterpartei)の代表として、劉紹周と安龍鶴(Ан Ен-хак, Ан Ен-хак)の2名を送った<sup>15)</sup>。

2人は評議権を持つ代表の資格で大会に列席し、特に劉は朝鮮代表の朴鎮淳とともに、インターナショナルの任務に関する委員会と民族・植民地問題委員会の委員になっている<sup>16)</sup>。さらに、劉紹周は同大会期間中の7月25日に、のちにコミンテルン代表として中国で活動することになるスネーフリート(マーリン)、およびその年の暮れに上海を訪れることになる朴鎮淳と、上海にコミンテルン執行委員会の極東ビューローを設立することにかんして、意見を交わしている<sup>17)</sup>。

劉紹周らの参加資格で興味深いのは、大会直前の1920年6月19日付けでウラジオストックから発出された「東アジア書記局」の電報であろう。すなわち、ヤンソン、朴鎮淳、ロウ(Лю すなわち劉紹周)らにコミンテルン大会での全権を委任するとしたこの電報の署名者の1人として、ヴィレンスキー・シビリャコフと並んでヤンツォビン(Янтзобин)、すなわち中国人の姚作賓(1893-1949)の名前が見えるのである<sup>18)</sup>。当時、中国の全国学生聯合会の幹部であった姚作賓は、この年5月にウラジオストックを訪れて現地のロシア共産党組織と接触し、中国の革命運動の支援について話し合っていた<sup>19)</sup>。その後、上海にもどった姚作賓は、当地で労働運動にかかわりを持っていた黄介民らとはかり、朴鎮淳、李東輝などいわゆる高麗共産党上海派の人士と連携して共産主義組織の発起に乗り出すのだが、この電報はそうした活動(「正宗」中国共産党とは別の動き)の機縁を示すものにほかならない<sup>20)</sup>。

さて、在露居留民ではあるものの、二大会連続で中国代表をつとめた劉紹周は、時を同じくして中国本土で結成されつつあった共産主義組織と連携し、来

るべき中国での本格的な活動への協力を期待され、コミンテルンの命を受けて帰国（1920年12月13日に中国政府の官員張斯麟とともに満洲里に到着）<sup>21)</sup>したにもかかわらず、その後、ほどなくして共産主義運動から離脱してしまった<sup>22)</sup>。実は、かれの帰国の直後に、中国への働きかけの窓口となることが決まっていたロシア共産党（ボ）中央委員会シベリア・ビューローの東方民族セクションは、劉について次のような厳しい評価を下していた。

コミンテルンは劉紹周を信任し、かれを中国での活動に派遣したが、かれは十分な政治的資質を持ち合わせていないし、その思想や信念をとってみても、社会主義運動と相携えていける人物ではまったくない。……ロシア共産党中央委員会は、東方に中国人共産主義者中央組織ビューロー〔俄国産華員局〕を派遣しているが、そのメンバーは党員としての自制力に欠け、政治的資質も低く、中国人の中で革命活動を組織することはまったくできない<sup>23)</sup>。

この評価と懸念が的中する形になったのか、それとも劉がこうした酷評を下す組織の意を察してそれを嫌ったのか、そのあたりは不明だが、初期コミンテルン大会の中国代表であったかれがコミンテルンの活動を離れたことによって、在露居留民グループが中国代表を代理するという変則的事態は終わりを告げる。そして、それに代わる中国代表、すなわち中国本土の共産主義運動を代表する組織が、コミンテルンに代表を送ることになる。1921年の第3回大会である。おりから中国では1920年半ば以降、ソヴィエト・ロシアからの使者ヴォイチンスキーの支援を受け、上海の陳独秀を中心とする共産党組織が立ち現れていたところであった。

### 3 第3回大会

#### (1) 江亢虎の2枚の代表証

1921年に開催されたコミンテルン第3回大会（6月22日～7月12日）は、在露中国人居留民が中国代表をつとめるという不自然な状況が解消された大会、それも中国本土から中国共産党の正規の代表が初めて出席した大会として、これまで中共党史の上でも、あるいは中国での国際共産主義運動史研究でも必ず

と言ってよいほど言及されてきた。中国共産党が上海で最初の党大会を挙行したのは、この大会の閉会后、間もなくのことである。

しかしながら、コミンテルン第3回大会に出席した中国代表は誰か、という問題については、実は食い違う諸説が並立している。この食い違いのそもそもの原因は、まずもって大会の公文書ともいべきその速記録の記載が、前後で微妙に異なっていることにある。すなわち、独語版速記録の冒頭では、中国代表は「共産主義団」(Kommunistische Gruppen)と「左派社会主義党」(Linke Sozialistische Partei)なのだが、同速記録末尾のリストでは、それが「共産党(K.P.)1名、青年団(Jugend)1名」になっているのである<sup>24)</sup>。また、その2人の代表のうち、「共産党1名」(あるいは「共産主義団」)の方は、中国代表として演説をした張太雷(Chang Tai-lai)と見てまちがいないのだが、「青年団」(もしくは「左派社会主義党」)からのいま1人の代表の名前は、速記録ではあきらかにされていないのである。実は、こうした記録のぶれは、中国代表間の参加資格をめぐる内紛を反映したものであった。以下、その検証に移ろう。

第3回大会に先だつ1921年5月ごろ、コミンテルン執行委員会は、1カ月後に控えた第3回大会に招請される各国組織の暫定的リストを「きわめて不完全なもの」という但し書きをつけて公表している。それによれば、中国からは「左派社会主義党」(Linke Sozialistische Partei)と「共産主義団」(Kommunistische Gruppen)の二つの組織が、いずれも評議権を持つ代表の資格で招請されることになっており<sup>25)</sup>、この二組織が、速記録冒頭の二組織に対応するものであることが確認できる。РГАСПИ所蔵の第3回大会関連の文書をたどると、このうちの「左派社会主義党」は、大会直前にモスクワに到着した江亢虎の「中国社会党」を指していることがわかる。江亢虎は、コミンテルン第3回大会に「社会党员」として列席し、発言権をあたえられたと自ら述べており、また、その代表証も存在する(後述)ことから見て、かれが同大会に出席したことはまちがいない<sup>26)</sup>。

江亢虎(Kiang-Kang-Hu, Кян-Кан-Ху, 1883-1954)は、中国における社会主義政党(中国社会党)の創始者として知られる。武昌蜂起の直後にあたる1911年11月に、いち早く社会主義を掲げる政党を結成、民国初年の政争の中で弾圧に遭い活動不能になるや渡米、ニューヨークのランド・スクール(Rand School)に関

係したり、クラスノシチョーコフ（A. M. Krasnoshchekov、のちに極東共和国首相）と交遊したとも言われる。1920年9月に中国社会党再建のために帰国、翌21年5月に、北京に駐在していたユーリン使節団の紹介で入露したのであった。そのモスクワ到着は6月21日、時あたかも第3回大会開幕の前日のことだったと言われている<sup>27)</sup>。江は1922年にロシア、欧州から帰国した後、「失望を感じた」そのソヴィエト・ロシア行を『江亢虎新俄遊記』として公刊したが、その中で自らのコミンテルン大会出席について触れ、次のように述べていた。

中国共産党青年団はロシア人の某君が中国で組織したものである。その正式の代表は江蘇の人張太雷で、イルクーツクの東方管理部〔コミンテルン執行委員会極東書記局のこと〕の紹介でやって来たのであった。わたしは共産党員ではないものの、社会党員の資格でこれに列席、厚遇を受けて代表と認められ、発言権〔評議権〕を与えられた<sup>28)</sup>。

江はさらにこの旅行記の中で、第3回大会前後のモスクワには、張太雷が代表した共産党のほか、張太雷らの代表権を認めない「少年共産党」を含め、四つの「共産党」の代表が参集し、それぞれが自己の正統性を主張して激しく相争ったことも記している<sup>29)</sup>。ただし、その正統争いの結果については、「どうなったかは知らぬ」と述べるだけで、袖手傍観といったところである。先の張太雷にかんする記述といい、共産党諸派の正統争いについての記述といい、江はモスクワでの自らの立場を、こうした正統争いの内紛とは無関係だったように記しているわけだが、実はその彼こそが、正統争いの渦中の人だった。この発端は、江が中国代表としてこの大会に出席していることを容認できない「中国共産党党員」兪秀松と張太雷の抗議であった。大会期間中にかれらがコミンテルン資格審査委員会に送った書簡は次のように言う。

貴委員会が江亢虎氏に代表証を発給したことに對し、中国代表団は二度にわたって抗議したものの、かれの代表証はいまだに回収されておりませんので、中国代表団は三度目の抗議をせざるを得ません。江亢虎氏が北京政府の大総統の代表として大会に参加することを貴委員会が認めるのであれば、我々はそれに反対するものではありません。しかし、かれが中国社会党の代表として大会に出席することを、貴委員会が認めるのであれば、それには反対です。中国社会党なるものは、中国には存在しないからです。

かれは単なるヤマ師か、さもなくば反動者の下僕にすぎません。もし、すべての革命的中国人にさげすまれているかれのごとき人物が、その代表としてコミンテルンに受け入れられるならば、それは疑いなくコミンテルンと中国共産党の活動と名声を損なうことになるでしょう。この江亢虎なる人物は、常に影響力を得る機会をうかがっているのです。……おのれの下劣な活動のために、かれがコミンテルンの公認代表だという事実を利用せんとしていることは明らかです。それは中国共産党を損なうことを意味します。我々はいかれの大会参加に断固反対するものであり、必要に応じては、貴委員会に江亢虎にかんするいかなる証拠でも提供する用意があります<sup>30</sup>。

すなわち、エセ社会主義者にしてゴロツキである江亢虎のような人物を中国代表と認めるコミンテルンの見識を疑うという抗議であった。実は、大会の開幕直後にコミンテルンの報道局が各国代表に署名を求めた用紙の中国部分には、江（中国社会党）と俞、張（中国共産党）の三人のサインが並んでいる<sup>31</sup>）のだが、どうやらそれは、中国共産党代表の2人にとっては、耐えがたい屈辱だったと見える。たび重なるかれらの抗議は功を奏した。抗議を受け入れたコミンテルン側が、江亢虎に発給した代表証を急遽回収したからである。今度は、一転して江亢虎が抗議する番だった。6月29日にコミンテルン議長ジノヴィエフに送った江の書簡は言う。

わたしは中国社会党を代表して当地に参りました。同党の組織は、先の声明でそちらに申し上げたとおり、第三インターと提携することを望んでおります。モスクワへ到着すると同時に、わたしはLuxの事務局に申請を行い、Shumiasky同志に委任状を手交しました。第3回大会の開幕日〔1921年6月22日〕に、わたしは議決権をもつ代表としての代表証（no.20）を受け取りました。しかし、4日間大会に出席した後、Kabasky同志は、わたしの代表証の回収を命じました。これにかんする何らの説明もなく、さらに列席者としての権利も剝奪されました。わたしは、これを一種の侮辱と考え、抗議いたします。貴殿がこの問題を再度考慮され、できる限り早期に回答されるようお願いいたします。……どこに申し立てれば、以前の代表証を返還してもらえるのか、あるいは新たな入場証を申請できるの

かにつき、ご教示いただければ幸いです<sup>32)</sup>。

かれが委任状を手渡したという Shumiasky とは、コミンテルン執行委員会極東書記局（イルクーツク）の責任者で、この大会にも参加したB. 3. シュミヤツキーのこと、またかれから代表証を取りあげたという Kabasky とは、コミンテルン執行委員会書記の M. コベツキーのことである。さて、この書簡はいくつかの重要な事実を含んでいる。第一に、あきらかに江亢虎は自らがその代表をつとめる中国社会党とコミンテルンの連携を期待してこの大会に参加していたということ、第二に、かれはその資格を認められ、当初いったんは議決権を持つ代表証 (mandate) を発給されたということ、そして第三に、その代表資格が大会期間中に、どういうわけか——実は先の兪秀松と張太雷の書簡に明らかのように、かれらの抗議があったからなのだが——剝奪された、ということである。ちなみに、江は後になって、代表証回収が張太雷らの差し金であることを聞き知ったようで、親しい人間に「あとになって詳しく知ったことだが、張某らはさまざまな証拠を持ち出してコミンテルンに書簡を送り、その中でわたしを中国政府のスパイだと目したのだった。かれの持ち出した証拠なるものがどんなものかは知らぬが、わたしが当時一つ一つ詳しく弁明したため、コミンテルンの側はそれを認めて、すぐに代表証を返してくれた」<sup>33)</sup>と語っている。

実は現在、問題の江亢虎の代表証は2枚存在する。1枚はモスクワ（РГАСПИ）に残っているもので、発給日、代表証番号、参加資格は、江の抗議書簡の言うとおりで、それぞれ6月22日、20番、議決権代表である<sup>34)</sup>。そしてもう1枚は、中国に残されている代表証で、様式はまったく同じながら、発給日が7月2日、代表証番号が244番、発給者はコベツキーと認められるものである<sup>35)</sup>。興味深いのは、こちらの新しい代表証の方は、代表資格が評議権代表に改められていることである。すなわち、江は、コミンテルン側がかれの説明に納得してすぐに代表証を「返してくれた」と語っているが、かれが受け取ったのは回収された元の代表証ではなく、参加資格を変更して再発給された別の代表証だったのである。

つまり、上記2通の抗議書簡と現存する江亢虎の2枚の代表証により、かれの代表資格は大会期間中に次のような経過をたどったということが判明するのである。すなわち、江亢虎は大会開幕当初、中国代表の一員（中国社会党代表）

として、議決権を持つ代表の資格でこの大会に出席したが、これに反発する中共代表のたび重なる抗議の結果、コミンテルン側（コベツキー）はかれに発給した代表証を数日後に回収することになった。だが、それに対して今度は江が抗議したため、コベツキーは再度代表資格を与えることを認め、7月2日に新たな代表証を発給した。ただし、そのさい、おそらくは中共代表の反発を考慮して、その資格を評議権を持つ代表に格下げした。最初の代表証は回収された後、モスクワの文書館で長き眠りにつき、2枚目の代表証は、大会終了後に江がそのまま中国に持ち帰り、その後の紆余曲折を経て、江亢虎伝の資料写真になった、と。

先に紹介したように、江はモスクワでの自らの立場について、帰国後の著書で「わたしは共産党員ではないものの、社会党員の資格でこれに列席、厚遇を受けて代表と認められ、発言権を与えられた」と述べていたわけだが、それは一方で自らのコミンテルンへの接近の動機を曖昧な形で隠蔽し、他方で上記のような複雑な交渉の結末だけを、ごく簡単に要約したものだったわけである。こうして事の経緯を解きほぐしてみると、第3回大会の中国代表をめぐる速記録の記載が前後でやや食い違っている謎も、おのずと氷解しよう。江亢虎は、当初は中国代表として出席したものの、大会期間中に正式の中国代表とはカウントされなくなり、それに代わって青年団からの代表1名（俞秀松）が正規の中国代表として補充されたのだが、それが速記録では、未整理のままいい加減に処理されてしまったのである。したがって、第3回大会においてコミンテルンに認定された中国代表は、正しくは、張太雷（中国共産党）と俞秀松（中国社会主義青年団）の2名の評議権代表ということになる。中国共産党の代表である江亢虎は、当初は議決権代表の資格を与えられたが、大会期間中にそれがいったん剝奪され、その後、今度は評議権代表の資格を与えられて大会に列席したものの、大会の最終的公文書においては、中国代表としてカウントされなかったということになるだろう。ちなみに、代表の肩書き以外でこの大会に参加した者（来賓、傍聴者）に、記者の瞿秋白、および上海の社会主義青年団（あるいはその系列の外国語学社）からやって来た陳為人、王一飛、卜士奇、袁篤実、任岳、呉芳らがいたことが確認できる<sup>36)</sup>。

ところで、大会期間中の身分の変更というゴタゴタはありながら、江亢虎が

かりにもコミンテルンの厚遇を受けたのは、いったいどういうわけだったのだろうか。当時、中国国内では、ソヴィエト・ロシアからの働きかけを受けて、共産党結成へ向けた動きが進行していたわけだし、現に俞秀松と張太雷がその代表資格でモスクワにいたわけだから<sup>37)</sup>、それとはハッキリ系統を異にする江亢虎（中国社会党）が、正式の中国代表の資格を認定されたことは、一見すると奇異に映る。だが、それは「後に漢奸となるエセ社会主義者」という後世の評価を知っている我々にとってはそうだけで、当時の、それも中国国外の人士のかれに対する評価はおのずから別のものであったようである。特に革命に共感を寄せる在露中国人居留民の一部指導者にとって、いち早く社会主義を掲げた江の声望は、かれが北洋軍閥の迫害を受けて亡命を余儀なくされた「名士」であったことも手伝って、孫文と並んで高かった。その典型は、江のアメリカからの帰国を間近に控えた1920年7月に、在露中国人居留民の共産主義組織（前述の俄国共産華員局）の指導者の1人である劉謙（Лю-Цянь, ロシア名：Федор, Федоров）が、「中国共産党」の名義で中国国内の共産主義者に送った呼びかけである。劉は其中で、江亢虎の事績を紹介する一方、華員局の委任をうけて中国にもどった江の消息を尋ねるとともに、中国の同胞が江を「親密な同志」とするよう希望していた<sup>38)</sup>。この時期のロシア共産党には、革命派の在露居留民からなる共産主義組織を拡充して、これを中国に送り込み、知名度のある江亢虎や動員力のある学生組織を抱き込んで大がかりな運動を展開しようという冒険的な機運が、一部に確かに存在していた<sup>39)</sup>。中国国内の社会運動の実際を知らないかれらが、国内よりもはるかに国外で評判の高かった江亢虎を、「先覚者」ゆえに「海外流浪」の辛酸をなめた生え抜きの社会主義者として、高く評価したとしても、何の不思議もない。

さらに、ここで見逃してならないのは、江亢虎が7年にわたる在米生活を通じて、流暢な英語と洗練された社交術を身につけていたということである。西洋語によるコミュニケーション能力は、つとに国際社会主義運動の一員たるための必須の条件であり、かりにコミンテルンの主要共通言語であった独語、露語に通じていないとしても、少なくとも英語による意思の疎通がはかれなくては、モスクワでのコミンテルンの活動に主体的にかかわることは不可能であった。ただし、欧州やその植民地の出身の知識人社会主義者ならいざしらず、社

会改革者、あるいは広く知識人なるものが、必ずしも多言語に通じているものだと想定されていない東アジアにおいては、この条件を満たす者は、しばしば特殊な立場にあった人間——あるいは周辺の人物——だったということを考慮する必要がある。日本の場合であれば、初期のコミンテルンの活動に参加した人物は、片山潜、吉原太郎、田口運蔵等々、すべて在米経験を持つ者だった。むろん内地から日本人社会主義者がソヴィエト・ロシア入りする場合、多くの障害があったのだとも言えるが、片山らは在米時代に培った外国語コミュニケーション能力と人脈をいち早く発揮し得る立場にあったがゆえに、初期のコミンテルンの活動に足跡を残せたという面は否定できまい。また、コミンテルン史にその名を残す朴鎮淳をはじめとする初期の朝鮮代表の多くも、シベリア、あるいは露領極東の出身者で、露語によって意思の疎通をはかれるという条件を持っていた。同様に、コミンテルン第1回大会、第2回大会の中国代表が、やはりロシアで教育を受けた居留民であったことは、前節で述べた通りである。

こうした観点から第3回大会当時の中国代表を見るならば、中共代表2名のうち、俞秀松（当時21歳）は英語とエスペラントの初歩をかじった程度<sup>40)</sup>、一方、張太雷（当時23歳）の方は学生時代から天津の英字新聞や外国人のために英語の通訳や翻訳をしていたといい<sup>41)</sup>、実際のちにマーリン、ボロジンら来華コミンテルン関係者の英語通訳をしているから、英語に堪能では相当に流暢だったことはまちがいない。ただし、在米生活7年の間に英語の講演を数々こなし、英文著作もある江に比べれば、いささかの遜色あるは免れなかったであろう<sup>42)</sup>。現に、コミンテルン大会文書に収録されているコミンテルン事務局との交渉にかかわる文書やメモなどには、江の執筆にかかるもの（英文）が多く、それにたいして張太雷らの手になる文書は、さきの抗議書簡のように、英文のものがないではないが、格段に少ない。また、張太雷らの文書は、英語の自筆のものより、事務方によって準備されたとおぼしき露語の文書にサインだけをしたものの方が多い。残された文書から浮かび上がってくるのは、大きな問題があれば強い意思表示をするものの、それ以外はおおむね「お客さん」状態の中共の代表と、それに対して得意の英語力を生かして積極的に社交を展開する江亢虎という図式である。西洋語によるコミュニケーション能力と

いう点でも、江は国際社会主義運動の舞台で活躍する上での欠かせない資質を備えていたと言えよう。

## (2) 「中共」代表の立場

開会当初、議決権を持つ中国代表だった江亢虎を、たび重なる抗議によって正式代表から除外することに成功した「中共」代表の張太雷、俞秀松であったが、実はかれら自身の参加資格にも問題がないではなかった。簡単に言えば、かれらは大会に「中国共産党」の代表資格で出席したのだが、実は兩人ともに、当初よりコミンテルンの大会に中共を代表して参加するためにソヴィエト・ロシア入りしたのではなかったということである。

まず、俞秀松だが、かれの入露（1921年3月29日に上海を立、4月上旬に北京、ハルビンを経由して陸路入国）<sup>43)</sup>は、厳密に言えば、コミンテルンの大会ではなく、同じ時期にモスクワで開催されることになっていた共産主義青年インターナショナル（略称キム）の大会に中国社会主義青年団の代表として出席するためであった。かれは入露を目前に控えた4月6日にハルビンから両親に書簡を送り、その中で入露の目的をこう述べている。

第二次国際少年共産党〔キムの第2回大会のこと〕が4月15日にR京〔モスクワ〕で開かれることになっていて、先月に向こうからわざわざ代表が中国にやって来て、代表を派遣してほしいと言ってきました。わたしは上海の同志に代表に推挙されたため（中国からは2人の代表が派遣されることになっていて、北京1人、上海1人です。北京の代表もわたしの以前の工読互助団の友人で、かれは先に出発しました。わたしは旅費の問題があったため、今日まで遅れてしまったのです）、急行せねばならないのです<sup>44)</sup>。

俞秀松は、北京での工読互助団運動の失敗の後、1920年3月末に上海にやって来て以来、一貫して陳独秀らの中共結成活動に直接に関与した人物である。その点で言えば、中共の代表としてコミンテルンの大会に出席してもおかしくはないのだが、入露目的を率直に伝えるこの書簡を見る限り、かれの中国出発時の身分は、あくまでもキムへの中国代表にとどまる。また、モスクワに残されているかれのコミンテルン大会出席のための委任状も、それを裏付けている。すなわち、大会への参加資格を文書的に保証するかれの委任状は、中国国内の

組織（例えば中共）が発給したものではなく、コミンテルン執行委員会書記局が大会の直前（6月4日）にモスクワで発給したものなのである<sup>45)</sup>。コミンテルン大会に出席する各国の代表は、おおむね派遣元にあたる本国組織のしかるべき紹介状なり、委任状なりを携えて大会にやってくるものであり、例えばアメリカから第3回大会に出席した日本代表の田口運蔵は、片山潜（在メキシコ）の署名した日本人共産主義団（Japanese Communist Group）の委任状などを携えている<sup>46)</sup>。これに照らして兪秀松の参加資格を見るならば、かれは当初より、「コミンテルン」の大会に「中共」を代表して参加するためにソヴィエト・ロシア入りしたのではなかったという結論になろう。かれの大会参加は、モスクワ到着後にコミンテルン側の配慮によって認められたのであった。

いま一人の「中共」代表とされる張太雷の大会参加の経緯は、さらに奇怪である。張太雷は長らく、コミンテルンに派遣された最初の中共黨員と言われ、同時に1927年末の広州蜂起で壮烈な最期を遂げたことも手伝って、中共の草創期からのメンバーであったかのごとく考えられてきた。そうした推測が実は明確な資料的根拠を欠くものであるということが指摘されるようになったのは、ごく最近のことで、入党の経緯を含めて、かれの前歴はなお多くの謎に包まれている。つまり、1921年初頭の入露以前に、かれが陳独秀らの中共発起グループにどの程度関わっていたのかはおろか、そもそも関わっていたのかどうかすら不明なのである。筆者はかつて、張太雷の身分やその入露の経緯にかんする既刊文献を総合的に検討して、おおよそ次のような推論を下したことがある。

張太雷は入露前、学生生活を送った天津でポリシェヴィキ・シンパのロシア人と接触することにより、ソヴィエト・ロシアに共感を持ち、天津で近い友人を募って社会主義青年団を結成した。その後、あえて言えば独断行動として、1921年初頭に自前の天津社会主義青年団を代表して入露、おりから中国人革命家の人材を求めていたコミンテルン執行委員会極東書記局のシュミヤツキーの信任を得て、3月に暫定の極東書記局中国科書記に任命され、その後中共の委任ではなく、極東書記局の指名による中共代表としてコミンテルン大会に出席した、と<sup>47)</sup>。これは極端に言えば、自前の組織を代表して独断で入露した張太雷とそれを信任したコミンテルンという構図であり、ある意味では張太雷を自称代表呼ばわりすることにつながるわけであるから、相当に大胆な推論で

ある。

ところが、その後に発掘された当時の文献の中に、張太雷にかんするこの推論を裏付けるのみならず、コミンテルン第3回大会の中共代表について新事実を伝える会議録が含まれていることが明らかになった。第3回大会の終了後間もなく、イルクーツクで開催されたコミンテルン極東書記局幹部会の会議記録(1921年7月20日)<sup>48)</sup>がそれである。会議の席上、第3回大会からもどったシュミヤツキーと、中国からやって来た中共党員のヤン・ハオデ(Ян Хаодэ: 楊明齋)は、それぞれ次のように発言している。

シュミヤツキー：〔コミンテルン第3回〕大会に出席した代表は、必ずしも本国組織の現状を反映したわけではなかった。例えば、イギリスがそうである。代表の選出は、しばしば偶然に左右された。これは一部の資本主義国の反動勢力の妨害によるものであり、それに伴う連絡不調が引き起こしたものである。

あらゆるエセ組織と袂を分かち、中国共産党の活動を紹介するために、わたしは極東書記局の指導者として、張太雷同志とともに報告を起草した。……我々がこの報告を作成したのは、それを第3回大会の記録に残し、今後の活動の基礎とするためであり、それによって共産党の成長を証明するためであった。前半の活動はすべて代表団とわたしが行ったものであり、今は第3回大会がそれを承認してくれるのを待つばかりである。わたしは代表大会の閉幕を待たずに〔モスクワを〕離れたが、大会が東方問題を討議するさいには我々の論点は認められると確信している。

中国にはまだまとまった中国共産党がないため、中国代表団は議決権も評議権も与えられないのではないかと思ったが、わたしが詳細にして客観的な報告をしたあと、コミンテルン執行委員会の小ビューローは、中国代表団に評議権を与える決定をしてくれた。……

ヤン・ハオデ〔楊明齋〕：グリゴリー同志〔ヴォイチンスキー〕が〔中国を〕離れて後、彼ら〔上海の共産党中央〕はコミンテルン極東書記局、およびポレヴォイ同志から何らの情報も得ていなかった。彼らは極東書記局の存在すら知らなかった。極東書記局からの電報で、第3回大会への代表派遣の提案、および張同志〔張太雷〕への委任状の承認を求められると、彼

らは喜んだ。張同志は、彼らのもとでは何らの活動もしたことはなかったものの、彼らはそれでもその委任状を承認したのだった。広州からの情報を受け取って後、彼らは2名の同志を代表大会に派遣するという決定を下したが、経費不足のために、ヤン・ハオデ同志〔すなわち自分〕1人を派遣したにとどまった。かれらも報告を準備し、ホードロフ同志を通じて送ったが、ここイルクーツクにはまだ届いていない<sup>49)</sup>。

まず、シュミヤツキーの発言からは、張太雷ら中共代表団のモスクワでの活動がシュミヤツキーの強力なサポートを受けていたことが知れる。代表としての資格さえ危うかった張太雷らが、シュミヤツキーの助力によって、評議権を持つ代表となったというのだから、その自負のほどを差し引いても、かれの持っていた実力が相当なものだったことだけは確かだろう。そして、それにも増して注目されるのは、ヤン・ハオデの発言である。すなわち、上海の中共中央はヴォイチンスキーが中国を離れた1921年初頭以後、コミンテルンの対中国活動の窓口であったイルクーツクの極東書記局との連絡を欠き、その結果、コミンテルン大会への代表派遣は、中国国内組織のあずかり知らぬまま、極東書記局の主導でなされ、国内の組織とは直接関係のない張太雷が任命されて中共がそれを追認したというのである。その一方、遅れて連絡を受けた中共中央がその代表として、資金難を押して派遣したヤン・ハオデこと楊明齋は、イルクーツクまでは来たものの、大会には参加できなかったということになる<sup>50)</sup>。コミンテルン第3回大会に張のほかにはヤン・ハオデ、あるいはヤン・ホウデ(Ян-Хой-Де)という代表がいたらしいことは、比較的早くから知られており<sup>51)</sup>、それを楊明齋に比定する見解もあった<sup>52)</sup>。また、第3回大会での中共の文書の一部(例えばコミンテルンあての報告)には、「ヤン・ホウデ」の署名すらついている<sup>53)</sup>のだが、どうやらそれは楊明齋が大会には出席できなかったものの、本来は代表として中国から派遣されてきたからだったのである。まさに「事實は小説よりも奇なり」を地でいく顛末であった。

ついでながら補足すると、会議での楊明齋の発言には、張太雷の第3回大会出席にさいして、その委任状が極東書記局から発給され、それを事後に中共が追認したことが述べられているが、その委任状が、兪秀松のものと共に、コミンテルン大会文書に残されている。まさに極東書記局(イルクーツク)の発給

によるもので、その日付は1921年5月16日である<sup>54)</sup>。また、張太雷が入露以前に、国内の中共系列の活動に直接関与していなかったということは、この時期に北京大学の学生として、張と同じく京津地区での社会主義運動に従事していたはずの劉仁静（中国共産党第1回大会の北京代表）が、「たしか当時〔1922年〕は、まだ張太雷のことを知らなかった。初めて張太雷に会ったのは、その後、上海のソ連領事館〔領事館の設置は1924年〕でのことだったと思う」<sup>55)</sup>と語っていることによっても、間接的に裏付けられよう。

さて、以上に述べたように、コミンテルン第3回大会の中国代表の問題は、はなはだ錯綜したものであった。また、兪秀松にせよ、張太雷にせよ、かれらは厳密な意味で中国から正規に派遣されてきた「党」の代表ではなかったが、幸いにも事後にこれらが問題になることはなかった。それは一つには、上海の中国共産党に明確につらなる兪秀松自身がこの大会に出席し、かれの代表する共産党がモスクワに参集したさまざまな「共産党」（あるいは江亢虎）との正統争いをくぐり抜け、コミンテルン中央の承認を勝ち得た唯一の中国共産党となったからである。そして、第二に、張太雷は当初必ずしも上海の中共中央と直接の関係を有しておらず、イルクーツクのコミンテルン極東書記局に重用されることでコミンテルン大会に「中国共産党」代表として参加したわけだが、かれがこの大会の期間中、そしてその後に、分派的行動をとることなく、中国共産主義運動の本流にあたる兪秀松、陳独秀らと協力し、一方中共の側も、張太雷の代表身分を追認（尊重）し、その選出手続きに拘泥しなかったからである。

コミンテルンとの公式関係の予期せぬ出発点となった第3回大会において、中共の代表資格問題がこうしたある種の“いい加減さ”によって、うやむやのうちに決着したことは、中共にとっては、実のところ幸いなことだった。ある組織の正統性を国外の組織（あるいは世界的な組織統一）が認定し、そのさいに基本的には一国（地域）に一党しか認めないという各国共産党とコミンテルンとの間に存在した組織原理は、それが厳密に適用される場合に、しばしばコミンテルンへの代表参加資格をめぐる各国共産主義諸組織の正統争いや分裂、内紛をもたらしたからである<sup>56)</sup>。この第3回大会の前後の時期においては、アメリカ、イギリス、ドイツ、チェコ・スロヴァキア、朝鮮などの共産主義組織がコミンテルンを舞台に、大なり小なりの正統争いを繰り返していた。とり

わけ、イルクーツクの極東書記局が介在した極東地域においては、朝鮮の共産党のように、極東書記局の支援を受けて結成された高麗共産党（イルクーツク派）が上海派との組織調整をせぬままに第3回大会に代表を送り、それがその後の深刻な内訌を招くという事態が実際に生じたのだから、この場合の中共の鷹揚な対応は、中共の最初の歩みを期せずして順調たらしめたと言うべきであろう。もっとも、中国の場合は、国内で社会主義運動を指向する知識人たちが、陳独秀という自他共に認める有力指導者を核としてある程度の結集を見せており、それに対抗しようとするような社会主義勢力というもの、内外を含めてほとんどなかったという面もあろう。また、この第3回大会ののち間もなく、明確なるコミンテルンからの代表2名の臨席を得て、中共は第1回の党大会を開くことになるわけだから、そもそも分派の生じる余地は、ほとんどなかったのである。コミンテルンとの関係でいっても、中共はひとまず順調に誕生し、成長を開始したのであった。

## 4 第4回大会

中共は1922年6月に開催した第2回代表大会で、正式にコミンテルンに加入することを決議した<sup>57)</sup>。いわゆる“21カ条の条件”を完全に承認して、コミンテルンの中国支部たることを認めたのである。中共はこれに先だつ第1回大会で、コミンテルンへの加入を事実上決定しており<sup>58)</sup>、また前節で見たとおり、1921年のコミンテルン第3回大会に代表を——変則的な形式ながら——送っていたから、実質的にはすでにその一員であったわけだが、やはり党としての正式決議によって、それを再確認したのであった。したがって、この中共第2回大会の後、1922年11月5日から12月5日にかけてモスクワ（開幕式のみベトログラード）で開催されたコミンテルン第4回大会は、中共にとって、当初より参加すべく派遣された正式代表が参加した最初の世界大会になったと言えるだろう<sup>59)</sup>。中共代表団を率いたのは、中共中央執行委員会委員長、すなわち中共最高指導者の陳独秀であり、この面でも国際共産主義運動への名実備わったデビューであった。なお、これより先、欧州に滞在していた中国人共産主義グループは、国内の党組織の承諾を前提として謝寿康らを第4回大会に

派遣する動きを見せたが、本国から陳独秀自身が出席することになったため、ヨーロッパ経由でモスクワ入りした同グループの一員である張伯簡（別名：紅鴻）が傍聴するにとどまったことも付記しておく必要がある<sup>60)</sup>。

第4回大会の公式記録にあたる速記録には、資格審査委員会の報告として、中国代表団にかんして「中国共産党：党員数300人、うち党費納入者は180人。3人の代表が招請されたが、現れたのは1人で、議決権が与えられた」という記載がある<sup>61)</sup>。審査委員会の挙げた中共の党員数は、中共代表団の申告にもとづいている<sup>62)</sup>。中共の党員数に関しては、この大会の4カ月ほど前に陳独秀がコミンテルンに送った活動報告では195人（うち女性が4人、労働者が21人）という数字が挙げられていた<sup>63)</sup>から、この大会までの数カ月の間に、百人ほど党員が増えたという計算になる<sup>64)</sup>。そのうちで党費<sup>65)</sup>をきちんと納入していたのは、3分の2程度であったというが、この割合は同時に報告されていた他国の共産党に比べて、とりたてて低いわけではなく、ほぼ平均的な数字であった。

さて、このコミンテルン第4回大会には、陳独秀、劉仁静、王俊の3人が中国（中共）代表団として参加したとされることが多かった<sup>66)</sup>が、この速記録による限り、招請されたのは3人だったものの、実際に中共を代表して参加（議決権代表）したのは1人ということになる。この1人とは、大会関連文書によれば、陳独秀（Чин-Гушу, Chen-Tu-Shiu）である<sup>67)</sup>。中共代表には、あらかじめ3人分の代表数が割り当てられていたにもかかわらず、また実際に中国からは、陳独秀、劉仁静、王俊<sup>68)</sup>の3名の中共党員がモスクワ入りしていたにもかかわらず、陳独秀のみが中共代表と認定されたのは、いささか不可解に映る。ただし、大会記録を仔細に検討すると、実際には劉も王も会議に参加していることが確認できる。劉仁静（Лю-Ен-Чин, Liu Jen Jin）はキム大会からの、また王俊（Ван-Чин）はプロフィンテルン大会からの参加者として、リストにその名が見えるのである<sup>69)</sup>。おそらくは、コミンテルン、および同時期に開催されるキムとプロフィンテルンの大会に3名の代表を送れという通知を受けた中共の側が、その意味を、それぞれの大会に1人ずつの計3人だと理解（コミンテルン：陳、キム：劉、プロフィンテルン：王）し、その際に中共代表としての委任状を陳独秀だけに発給したため、それを尊重したコミンテルンの資格審査委員

会が、「3人の代表が招請されたが、現れたのは1人で……」と処理したものと考えられる。このことは、コミンテルン大会文書に残されている中国代表の委任状が、陳独秀のもの1通だけであることによって、裏付けられよう。陳の持参した委任状は、小紙片に記した略式のものだが、第3回大会時の張太雷や俞秀松のものとはハッキリ違って、本国組織、つまり中共が発給したものである。

陳独秀（Chen Tu Siu）同志は、中国共産党（Chinese Comm. Party）によって、モスクワでの第4回大会の代表に任命された。

北京、1922年10月3日

中央委員会に代わって

李守常（Li ShouChang）<sup>70)</sup>

この委任状によって、陳独秀が入露すべく北京を離れたのが、10月3日以降であったというかれの足どりの一端があきらかになる。また、陳独秀にしてみれば、自らが最高責任者をつとめる組織の代表であるから、自署の委任状でも差し支えないはずだが、わざわざ中央委員会の承認を得る形で、李守常（すなわち李大釗）の署名にしている点に——さらに言えば、党首自らが委任状を準備して持参するという自体に——かれらの周到さ、あるいは組織体というものに対する原則意識をかいま見ることができよう。中国国内でこそその名を知らぬ者のない陳独秀ではあるが、かれの名も、またかれの党も、かれがこれから赴く国際共産主義運動の舞台では、まだまだ知られていないのである。

さて、正式の中共代表（議決権代表）としてコミンテルン大会に出席したのは陳独秀1人であったが、実際の議事において報告を担当したのは、劉仁静であった。これは劉自らも語っているように、「陳独秀は英語はわかるが、それで自分の考えを自由に述べることはできなかった」からであった<sup>71)</sup>。本来、この大会には、モスクワに滞在していた瞿秋白（Цю-Цю-Бо）が「中国語—日本語—ロシア語の通訳」という実務補佐員として加わっており<sup>72)</sup>、ロシア語のできない中国代表団の日常的な活動や折衝の面倒を見ていたはずだが、いく

らロシア語に堪能とはいえ、正式の中国代表団に入っていないかれが中国代表の報告を代読するのは無理があったと見えて、北京大学で英語をみがいた劉仁静（当時20歳）がその大任を担ったのである。劉仁静の「中国情勢に関する報告」、および独善的なその報告へのK. ラデクの批判については、すでに全文が公表されているので、ここでその内容に立ち入ることはしない。

ただ、ドイツ語でなされたラデクの批判発言にたいして、中共代表団が応答した形跡があることだけは指摘しておこう。すなわち、ラデクは発言の中で、中共がこの年の奉直戦争に際して呉佩孚を支援し、呉のもとに党代表を派遣したと述べているが、それに対して中共代表団は翌日に陳独秀の名義でコミンテルン幹部会に書簡を送り、そうした事実はまったくないと反論しているのである<sup>73</sup>。大会の議事とその発言内容は、翌日には会議公報（Bulletin 英独仏露の4カ国語版があった）の形で印刷され、各国代表が読めるようになっていたから、陳独秀や劉仁静は翌日の公報でラデク発言の内容を詳しく知り、ただちにその訂正を求めたものと見える。この書簡は便箋にして半ページほど、大会期間中の中共代表の肉声としては、ほぼ唯一のものである。ただし、この訂正要求が、大会後に編纂された議事録に反映された形跡はない。どうやら、かれらが中共の名誉のために、これだけは、という意気込みで発した抗議の内容は、コミンテルンの幹部会からは、やや微細に過ぎると受けとられたようである。

このほか、陳独秀は、大会期間中に「中国の労働運動」「中国の政治情勢」「中国の政治党派と反帝戦線のスローガン」「中国の土地問題」などのテーマで何度か発言したという説があり<sup>74</sup>、また「中国の政治情勢——中国代表陳独秀同志のコミンテルン第4回大会における報告（1922年11月 モスクワ）」、「中国の政治党派と反帝統一戦線のスローガン——陳独秀同志のコミンテルン第4回大会における報告（1922年）」という文書が現存している（共にロシア語<sup>75</sup>）。ただし、それらはあくまでも書面で提出した報告の露語訳であって、陳がその内容で発言をしたということではないようである。また、陳が大会期間中に「東洋問題にかんするテーゼ・決議検討委員会」や「朝鮮問題委員会」に名を連ねていることは確認できる<sup>76</sup>が、最も大事な報告すら劉に委ねるほどであるから、外国語に堪能でないかれが、大会やそれら委員会で積極的に発言したとは、にわかには信じがたい。大会期間中の陳独秀や中国代表団の待遇につい

て、劉仁静は次のように述べている。

コミンテルン大会の盛会ぶりの一方で、中共代表団が受けた注目は十分ではなかった。当時、我々は当初は大きな期待を抱いて大会に参加したのだが、大会の期間中、中国共産党の創始者、あるいは指導者たる陳独秀も、我々と同様に普通に会議に出ただけで、コミンテルンの指導者たちがかれに対して、特に厚く礼遇したということもなければ、特に個別の意見交換の場を設けるということもなかった<sup>77)</sup>。

これが、若き中共党員の目に映った大会の現実だった。結党後、まだ日も浅く、これといった成果を挙げてもないこと、そしてコミンテルン首脳らとの意思の疎通に欠かせない外国語のコミュニケーション能力の不足が、こうした「坐っているだけ」の中共代表団の背景にあったことは言うまでもあるまい。

かくて、この大会で採択された「東洋問題についての一般テーゼ」を中国の現場にいかに関適用するかという問題を話し合うコミンテルン執行委員会の会議は、陳独秀ぬきで行われることとなった。コミンテルン第4回大会終了後に行われたその会議(12月29日)では、「モスクワにいる中国代表を委員会の会議に招請すべき」<sup>78)</sup>ことが提起されたが、そのころ陳は、第4回大会の決議を踏まえたいくつかの計画<sup>79)</sup>を策定した後、すでに帰国の途についていたからである。モスクワのその会議に招請され、中共党員の国民党への加入の是非など、その後の中共に大きな影響を及ぼす諸懸案にたいして意見を述べたのは、コミンテルン第4回大会に参加したヴォイチンスキーと、陳独秀と入れ替わるように中国からモスクワへやってきたマーリン(モスクワ到着は12月23日)であった<sup>80)</sup>。中国での活動経験を持つヴォイチンスキーとマーリンは、国民党の評価や中国における社会運動の基盤をめぐって見解を異にし、それは「中国共産党の任務についての決議(東洋問題についての一般テーゼ補充)」と「国民党にたいする中国共産党の態度の問題についての決議」<sup>81)</sup>という半ば相矛盾する二つの決議を生みだし、ひいてはその後の国共合作のありようにも大きく影を落とすことになるのだが、そうした議論は、陳独秀の直接にあずかり知らぬ場でなされたのであった。むろん、かりにその場に陳が立ち会っていたとしても、かれの意向がどこまで会議に反映されたかは、おのずから別問題ではあるが……。

最後に、この大会に参加した陳独秀の足どりについて、若干の補足をしておこう。これまで、コミンテルン第4回大会に参加した陳独秀がいつ中国を離れ、いつモスクワに着いたのか、あるいは大会の終了後、いつ中国にもどったのか、についてはごく漠然とした記述がなされてきたにすぎないからである。まず、かれが上海を発って北行した日時については不明だが、10月13日付のマーリンの報告（当時在北京）は、陳独秀らは10月4日に満洲里に向けて北京を発ったと述べている<sup>82)</sup>。先に掲げた李大釗署名の委任状の日付が10月3日だから、陳はその翌日に北京を離れたことになろう。次いでそのモスクワ到着だが、北京で陳独秀と合流した劉仁静によれば、北京からモスクワへの交通事情はこの時期でも悪く、道中一カ月余りを要した結果、モスクワに到着したときには、革命記念日（11月7日）はもうとっくに過ぎていたという<sup>83)</sup>。つまり、コミンテルン第4回大会の開幕には、間に合わなかったというのである。そして、劉は別の回想録では、この記憶を大会の日程と照合させることによって、11月8日にモスクワに到着したと断言している<sup>84)</sup>。そもそも、コミンテルン第4回大会の開幕式が11月5日のペトログラードに設定されたのは、開幕式をすませた各国代表を、直後の革命記念日の式典に列席させ、引き続き会場をモスクワに移すという演出を考えていたからだった。そのことを知っていた劉仁静が、自分たちのモスクワ到着は革命記念日の後だったと言っているわけだから、その証言は相当に確かなものだと言ってよいだろうし、また仮に中国代表団が大会に遅参したとしても、儀礼的に行われた開幕行事に間に合わなかっただけで、本会議にはきちんと出席していたのだから、さほど問題はあまい。

ところが、奇妙なことに、陳独秀ら中国からやってきた3人にたいして作成された写真入り参加者票<sup>85)</sup>——参加者自身の署名を持つ——には、いずれも大会開幕以前の10月30日の日付が記されているのである。この記録をそのまま信じれば、モスクワには遅れて到着したというのは、劉仁静の記憶違いで、実際には大会前に余裕を持ってモスクワ入りしていたことになる。だが、憧れの地モスクワに初めて赴いた劉がハッキリと、大会の開幕式や革命記念行事には間に合わなかったと断言しているのであるから、こればかりは、大会の記録とはいっても、その作成期日をそのまま鵜呑みにするには問題があろう。考えられる可能性はただひとつ、すなわち大会の開幕日が迫っても一向に姿を見せ

ない中国代表団にたいして、事前に招請人数分（3枚）の参加者票が作成され、実際の写真や署名は到着後に処置されたということである。

この便宜的措置の背景として考えられるのは、陳独秀らとは別ルートで先にモスクワ入りした前述の張伯簡の存在である。張の参加者票の日付が陳独秀らのものより1日早い10月29日であることに注目するならば、次のような推測が成り立とう。すなわち、大会参加を予定されていた中国代表団が到着していないのに、すでにモスクワには欧州の中国人共産主義グループから派遣された張伯簡が到着していて参加登録を済ませている。となれば、第3回大会のごとき紛糾を避けるためにも、未到着の中国代表の参加者票をあらかじめ準備しておく必要がある、という配慮がなされたのだ、と。あえて想像をたくましくすれば、未到着の中国代表のための参加証作成の背後に、瞿秋白（それ以前よりモスクワに滞在し、第3回大会で代表資格をめぐる紛糾が起こったことを知っている）の介在を想定することも可能なように思われる。ここでは、とりあえず中国代表のモスクワ到着の期日を、劉の回想の通り、11月8日と考えておく。

陳独秀がモスクワを離れた期日については、ハッキリとそれを確定する資料は確認できないが、陳独秀の依頼を受けて中国帰国を決意した瞿秋白が大会終了後の12月21日にモスクワを離れていることからすれば、陳独秀もそれに同行したと考えるのが自然であろう<sup>86)</sup>。陳独秀の北京帰還は年の明けた1923年の1月10日、一方、中国入境にさいして、慎重を期すために別行動をとったという瞿の北京到着は1月13日であった<sup>87)</sup>。いずれにせよ、先に述べたとおり、中国での運動方針を話し合うコミンテルン執行委員会の会議が12月末からモスクワで開催された時、陳独秀がすでにモスクワを離れていたことだけはまちがいない。かれのモスクワ滞在が短かった理由としては、当時上海で進行中だった国民党との合作交渉をまとめる上で、陳が長期にわたって中国を離れることは好ましくなかったということも考えられる<sup>88)</sup>が、他方で劉仁静は、さっさと中国へ帰ってしまった陳の心情を、「その上、大会における我々の発言は、コミンテルンの指導者たちによって“ほら吹き〔吹牛〕”と思われたのだから、どうしたって面白いことではなかった」<sup>89)</sup>と忖度している。その後のコミンテルン（ロシア共産党）と陳独秀の葛藤を考え合わせると、それを予感させる最初の、そして最後の訪ソであった。

コミンテルン支部としての中共の存在、特に初期のコミンテルン大会における中共代表団（党員）の活動を実際の面から見た場合、そこには言語の不習熟や文化的背景の違いに起因する障壁が避けがたく存在し、それが往々にして、コミンテルン組織にたいする中国人参加者の関与の程度を左右したという国際会議の現実があった。そして、この現実はやがて、コミンテルン首脳なり、各国におけるコミンテルン代表なりと、日常的にコミュニケーションをとれる「国際派」の人物が、各国党の中枢を占めていくというもう一つの現実を生み出していくことになろう。中国の場合で言えば、初期における張太雷、瞿秋白、その後における王明などの台頭は、かれらの外国語能力やそれに付随するコミンテルン代表との緊密な関係と切りはなして説明することはできない。理論の習得なくしては革命活動がなかったように、外国語（特にロシア語）の習得なくしては、コミンテルンと中共との関係の中で重要な位置を占めることは——少なくとも1930年代以前においては——不可能であった。この点をとらえれば、初期の中共は、国際機関の強い統制と同時に異言語の制約を受けるという二重の拘束下にあったと言うことも可能であろう。それは、中共がコミンテルンなり、ソ連共産党なりの「通訳」と化す危険性を常にはらんでいたことを意味する。そして、そうした事態が単なる危険性にとどまらず、時として現実となっていたことは、コミンテルンの駐華代表ボロジンの専横的態度を批判した蔡和森（当時、中共中央局委員）の次の言葉（1926年）に明瞭である。

かれ〔広東にいるボロジン〕は、〔上海の中共〕中央には三人しか人がおらず、『嚮導』には現実に編集者がいないといった状況を考えもせず、〔党中央局委員の〕瞿秋白を通訳として向こうに引っ張って行ってしまった。……ボロジン同志は中国に着任して一年余りになるが、これまでわが党の日常活動に意を払ったことなどなく、そのわが党にたいするは、あたかも通訳供給機関にたいするが如くである<sup>90)</sup>。

同様の事態を、離党後の陳独秀は、中共は「スターリンの蓄音機」に成り下がってしまったという言葉で表現した<sup>91)</sup>が、「通訳供給機関」にせよ、「蓄音機」にせよ、こうした事態は、中共がコミンテルン支部であることに起因する組織的制約が、常に言語的制約とともに立ち現れるという中共とコミンテルンの関係性を如実に示していると言えよう。

初期のコミンテルン大会における中国代表をとりまく問題は、むしろその顔ぶれや参加資格を確定することによって一応の解決を見るものではある。しかし、その問題の解明の過程で浮かび上がってきた諸事実は、例えば、組織の運営形態（コミンテルン大会で言えば、それへの出席形態）が、しばしば活動の内実や関係性の実体を強く規定することになるといった点のみをとらえても、その後の中共とコミンテルンの関係全般へと及ぶものなのである。

### 注

- 1) 「共産主義インタナショナルへの加入条件（1920年8月6日）」（村田陽一編『コミンテルン資料集』第1巻、大月書店、1978、218）。
- 2) 1912年3月31日に上海の『民権報』に掲載された「中国共産党」の黨員募集広告、および同年4月28日の『盛京時報』（奉天）に載った「中国共産党」の政治綱領が、「中国共産党」なる名称の初出であると考えられる。綱領の字句からすると、同時期に結成された「中国社会党」と類似する点もあり、同党の亜流ではないかとも想像される。ただし、この「共産党」の具体的活動を伝える資料は残っていない。
- 3) 向青「關於共産國際和中国革命問題」（『北京大学学報』1979-6）。
- 4) 注3の論文をはじめとする一連の論考は、向青『共産國際与中国革命關係論文集』（上海人民出版社、1985）にまとめられているほか、向青『共産國際和中国革命關係の歴史概述』（広東人民出版社、1983）、同『共産國際和中国革命關係史稿』（北京大学出版社、1988）、向青・石志夫・劉德喜『蘇聯与中国革命』（中央編訳出版社、1994）という形で刊行されている。
- 5) この間の研究動向にかんしては、郭徳宏主編『共産國際、蘇聯与中国革命關係研究述評』（中共党史出版社、1996）参照。また、コミンテルンと中国革命を主題とする国際学会も内外で開催されている。その代表的論文集としては、Mechthild Leutner *et al.* (eds.), *The Chinese Revolution in the 1920s: Between Triumph and Disaster*, London / New York: RoutledgeCurzon, 2002、および中共中央党史研究室第一研究部編『「共産國際、聯共（布）与中国革命」国際學術研討會論文集』（中共党史出版社、2006）などがある。
- 6) 富田武「中国国民革命とモスクワ 1924-27年：ロシア公文書館史料を手がかりに」（『成蹊法学』49、1999）、土田哲夫「中国人のソ連留学とその遺産」（中央大学人文科学研究部編『民国前期中国と東アジアの変動』中央大学出版部、1999）、拙稿「国共合作の崩壊とソ連・コミンテルン——いわゆる「スターリンの五月指示」をめぐって」（『五十周年記念論集 神戸大学文学部』2000）、同「農村革命へのシフト——中国共産党の農民運動方針とコミンテルン」（森時彦編『中国近代の都市と農村』京都大学人文科学研究所、2001）がある程度である。
- 7) 日本にかんしては、岩村登志夫『コミンテルンと日本共産党の成立』（三一書房、1977）、

川端正久『コミンテルンと日本』（法律文化社、1982）、および村田陽一編『コミンテルン資料集』（大月書店、1978-1985）各巻の解説などがあり、また朝鮮に関しては、水野直樹「コミンテルンと朝鮮——各大会の朝鮮代表の検討を中心に」（『朝鮮民族運動史研究』1, 1984）、劉孝鐘「国民会とコミンテルン」（『靑丘学術論集』18, 2001）がある。このほか、コミンテルンとアジアとの関わりについての基礎情報（文献解題）として貴重なものに、伊藤秀一「20世紀のアジアとコミンテルン」（島田虔次等編『アジア歴史研究入門』第5巻、同朋舎、1984）がある。

- 8) 例えば、中共の歴次党大会、および党組織にかんする網羅の公式記録である中共中央組織部・中共中央党史研究室・中央档案馆編『中国共産党組織史資料』（全19冊、中共党史出版社、2000）には、コミンテルンの主要会議に参加した中共代表にかんする記述が散見するが、曖昧な記述が多いだけでなく、例えば陳独秀がコミンテルン第4回大会で「コミンテルンの執行委員に選出された」（同書第1巻、21）というような事実と反する記述も少なくない。これまでのところ、各大会ごとの中国代表を通観したものとしては、「共産国際会議簡介」（中国社会科学院近代史研究所翻訳室編訳『共産国際有関中国革命的文献資料』3、中国社会科学出版社、1990）、向青・石志夫・孫岩「中共代表等在共産国際的活動介紹」（前掲『共産国際与中国革命關係論文集』所収）があるが、いずれも正確さに欠ける。
- 9) 第8回プレナムについては、それがコミンテルン、中共双方にとって、中国革命の大きな節目となる時期（蒋介石の4.12クーデターと武漢分共の間）に開かれ、国民革命に極めて大きな衝撃をもたらす決定をした会議であるにもかかわらず、それに参加した中国代表は長らく不明であった。同プレナムの中国代表（チュグノーフこと周達文）については、すでに拙稿（*The Chinese National Revolution and the Eighth ECCI Plenum: Exploring the Role of the Chinese Delegate "Chugunov"*, in: Mechthild Leutner et al. (eds.), *The Chinese Revolution in the 1920s: Between Triumph and Disaster*, London / New York: RoutledgeCurzon, 2002）で詳しく検討してあるので、本章では触れない。
- 10) 前掲『コミンテルン資料集』第1巻、17-20。
- 11) *Der I. Kongreß der Kommunistischen Internationale: protokoll der Verhandlungen in Moskau vom 2. bis zum 19. März 1919*, Hamburg, 1921, S.5. 同速記録の末尾部分では、両者の名前は Lau-Sin-Dschau, Dschan-Jun-Kui と表記されている（S.170）。
- 12) 発言は注11の速記録に収められており、中国語訳もある（中国社会科学院近代史研究所翻訳室編訳『共産国際有関中国革命的文献資料（1919-1928）』1、中国社会科学出版社、1981、12-14）。
- 13) 劉紹周（劉沢栄）と張永奎の経歴については、李玉貞「關於参加共産国際第一、二次代表大会の中国代表」（『歴史研究』1979-6）が中国での先駆的な研究で、その後、劉以順「参加共産国際“一大”の兩個中国人」（『党史研究資料』1986-6）、同「参加共産国際一大的張永奎情況簡介」（『革命史資料』1986-4）などの研究がある。なお、劉紹周はソヴィエト・ロシアでの活動、コミンテルン大会参加についての回想録を残している（劉沢栄「回憶同偉大列寧的会晤」『工人日報』1960年4月21日、劉沢栄「十月革命前後我在蘇聯

- 的一段経歴」『文史資料選輯』60, 1979)。
- 14) *Der I. Kongreß der Kommunistischen Internationale*, S.55.
- 15) *Der zweite Kongreß der Kommunistischen Internationale: protokoll der Verhandlungen von 19. Juli in Petrograd und vom 23. Juli bis 7. August 1920 in Moskau*, Hamburg, 1921, S.780. マンダート(所属組織からの委任状)は、РГАСПИ, 489/1/30/70-72に見える。第2回大会の2名の中国代表のうち、An En-hak (Ан Ен-хак)は長らく安恩学という漢字があてられてきたが、近年になってそれが「安龍鶴」であることが判明した(李玉貞「旅俄華僑與孫中山先生の革命活動」張希哲・陳三井主編『華僑與孫中山先生領導的國民革命學術研討會論文集』国史館, 1997年; РГАСПИ, 5/1/166/4-5)。安の経歴(朝鮮人である)については、本書第1章参照。ちなみに、安の肖像は、コミンテルン第2回大会のさいに作成された大会代表たちのスケッチ画帳に収録されている(РГАСПИ, 489/1/68/59)。この肖像画の存在については、山内昭人氏の教示を得た。
- 16) *Der zweite Kongreß der Kommunistischen Internationale*, S.782, 789-790.
- 17) РГАСПИ, 489/1/14/122. ただし、極東ビューローは、その後の紆余曲折をへて、1921年1月にイルクーツクに設けられた。劉はイルクーツクに新設されるこのコミンテルン極東書記局の構成員に予定されていた(*Дальневосточная Политика Советской России: 1920-1922 гг.*, Новосибирск, 1996, с.155, 176)。
- 18) РГАСПИ, 489/1/28/1. この電報の文面については、本書第6章参照。なお、この電報の送信元である「東アジア書記局」が、コミンテルンに認知された正規の組織だったとは言い難い。
- 19) 「ロシア共産党(ボ)中央委員会シベリア・ビューロー東方民族セクションの機構と活動の問題にかんするコミンテルン執行委員会あての報告(1920年12月21日, イルクーツク)」(*ВКП (б), Коминтерн и Национально-Революционное Движение в Китае: Документы*, Т. I (1920-1925), Москва, 1994, с.49; 中共中央党史研究室第一研究部訳『聯共(布)、共産國際与中国國民革命運動(1920-1925)』北京図書館出版社, 1997, 50)。
- 20) 「日本共産党暫定執行委員会」代表の近藤栄蔵が1921年5月に上海で接触したのは、朴鎮淳、姚作賓らだった。姚作賓の組織した共産主義組織「大同党」については、拙著『中国共産党成立史』(岩波書店, 2001), 141-170参照。
- 21) 瞿秋白「欧俄帰客談」(『瞿秋白文集(政治理論編)』1, 人民出版社, 1987, 149)。
- 22) 前掲李玉貞「關於參加共産國際第一、二次代表大会の中国代表」などによれば、劉は帰国後に、裁判所の通訳、中東鉄道監事会監事、中東鉄道回収問題などの中ソ交渉のさいの国民政府側交渉人員、あるいは大学教師(法学、語学)、外交官(1940年に中華民国在ソ連大使館参贊)などを歴任。1949年以降は、外交部条約委員会法律顧問、全国政治協商会議委員などを歴任し、1956年に中共に入党したという。
- 23) 前掲「ロシア共産党(ボ)中央委員会シベリア・ビューロー東方民族セクションの機構と活動の問題にかんするコミンテルン執行委員会あての報告(1920年12月21日, イルクーツク)」。劉紹周にたいする低い評価は、「ベラ・クンのスミルノフあて書簡(1920年10月1日)」(前掲*Дальневосточная Политика Советской России: 1920-1922 гг.*, с.142)

にも見てとることができる。

- 24) *Protokoll des III. Kongresses der Kommunistischen Internationale (Moskau, 22. Juni bis 12. Juli 1921)*, Hamburg, 1921, S.13, 1068.
- 25) Zum III. Kongreß der Kommunistischen Internationale, *Die Kommunistische Internationale*, Nr. 17, 1921, S.368.
- 26) 江亢虎『江亢虎新俄遊記』（商務印書館，1923），26，汪佩偉『江亢虎研究』（武漢出版社，1998）の口絵写真，およびРГАСПИ，490/1/32/10，490/1/201/12，490/1/207/48。
- 27) 前掲汪佩偉『江亢虎研究』，164-172。
- 28) 前掲『江亢虎新俄遊記』，26。
- 29) 同前 60 頁。ちなみに，その四つの「共産党」とは，①「上海の学生姚君」が代表した「東方共産党」，②上海の社会主義青年団より大挙やってきた留学生たちの「少年共産党」，③黒龍江省黒河の中国共産党旧支部の「龔君，于君」が改組した「中国共産党」，④杭州の「張君」がその代表を自称した「支那共産党」である。ちなみに①は前述の姚作賓らが組織した党で，姚は朴鎮淳，李東輝らと共に1921年秋——すなわちコミンテルン第3回大会後——にモスクワ入りしたが，姚らの党を認めない兪秀松（中国共産党代表）はモスクワで，姚作賓を激しく非難し，コミンテルンに対してかれを相手にしないよう求める書簡（9月27日付）を送っている（РГАСПИ，495/154/81/9）。
- 30) РГАСПИ，495/154/81/12。なお，この書簡の署名は，「中国共産党党员：Сю Сун [兪秀松]，T. L. Chang [張太雷]」となっている。
- 31) РГАСПИ，490/1/32/10。
- 32) РГАСПИ，490/1/208/95。
- 33) 遊人『新俄回憶錄』（北京 軍学編輯局，1925），92-93。同書は1921年に単身ソヴィエト・ロシアを訪問したある中国軍人の旅行記である。同書において，江亢虎は友人の「海通君」として登場する。
- 34) РГАСПИ，490/1/207/48。
- 35) 前掲汪佩偉『江亢虎研究』口絵写真。
- 36) РГАСПИ，490/1/18，495/154/112。なお，コミンテルン第3回大会の中国人参加者（傍聴者を含む）は，それら全参加者のリストが大会期間中に何度も修正，改訂されていて，それら相互の出入もあるため，正確な顔ぶれを確定することはできない。この大会を傍聴したという蕭勁光が「われわれ留露学生は順番にこの大会に参加したが，当時は我々が代表かどうかはハッキリとしていなかった。たぶん傍聴だったと思う。けれども，代表たちとは食事も宿泊も一緒に，待遇は代表たちと変わらなかった」と述べているような流動的な状況だったのだろう（『蕭勁光回憶旅俄支部前後の一些情況』『党史研究資料』1981-6/7）。
- 37) 兪秀松と張太雷のモスクワ到着の正確な日付はわからないが，6月前半にモスクワに着いていたこと，つまりかれらの到着が江亢虎よりも早かったことだけは，まちがいない（РГАСПИ，490/1/208/93，490/1/17/9）。
- 38) РГАСПИ，495/154/5/1。

- 39) 薛衡天・李玉貞「旅俄華人共産党組織及其在華建党問題」(『近代史研究』1989-5)、李玉貞「孫中山與共産國際」(中央研究院近代史研究所, 1996)、84-86。
- 40) 「俞秀松烈士日記」1920年6月29日条(上海革命歴史博物館(籌)編『上海革命史資料与研究』1、開明出版社、1992)、および「周佛海より施存統あて書簡(1921年4月19日)」(外務省外交史料館、4.3.2.1-2-1)。
- 41) 謹小岑「張太雷与天津第一個团小組」(『回憶張太雷』人民出版社、1984、56-57)、華羊「瞿秋白與張太雷早年事」(『中共研究』10-7、1976)。
- 42) 在米時期の江については、前掲汪佩偉『江亢虎研究』、149-163参照。
- 43) 「俞秀松の両親および家人あての書簡(4月1日)」「同(4月6日)」(『红旗飄飄』31、中国青年出版社、1990、238-240)。
- 44) 前掲「俞秀松の両親および家人あての書簡(4月6日)」。この書簡で言及されている北京の代表(俞の工統互助団時代の友人)とは、何孟雄のことである。ただし、何は4月に中露国境の満洲里で捕まってしまう、入露には失敗した。詳しくは、前掲『中国共産党成立史』、201-202参照。
- 45) РГАСПИ、490/1/208/93。なお、キムとコミンテルンの大会への出席を認めるこの委任状でも、俞秀松は、あくまでも「中国社会主义青年団の代表」として両大会に参加している。なお、俞に対しては、これに先立つ5月16日に、イルクーツクのコミンテルン極東書記局が、キム大会出席用の委任状を發給している(РГАСПИ、533/1/32——漢訳は、中共浙江省党委党史研究室編『俞秀松紀念文集』当代中国出版社、1999、315-317に見える)。この委任状の日付、および様式が張太雷のコミンテルン大会出席用委任状(注54参照)と同じであることから見ると、コミンテルン極東書記局(シュミヤツキー)は、当初、張をコミンテルン大会代表、俞をキム大会代表と、ハッキリ分けて考えていたらしい。
- 46) РГАСПИ、490/1/208/11-12。なお、田口を送り出した片山潜ら「在米日本人社会主义団」の動向については、本書第2章参照。
- 47) 詳しい考証は、前掲『中国共産党成立史』、240-258参照。
- 48) РГАСПИ、495/154/89/4-5。この會議録は、ロシア科学アカデミー極東研究所のシェヴェリョフ氏によって發表された: К. Шевелев, К 80-летию образования Компартии Китая: новые документы, *Проблемы Дальнего Востока*, 2001, No.4。なお、中国革命にかんする露語資料の發掘、整理に精力的にとり組んでこられたシェヴェリョフ氏は、2003年7月27日に事故のため、急逝した。
- 49) ヤン・ハオデの発言に登場するボレヴォイ(Полевой)、ホードロフ(Ходоров)は、いずれも当時中国で活動していたポリシェヴィキ支持者で、中国人との連絡役を担っていた。その詳しい経歴などについては、前掲『中国共産党成立史』、111-114、122、132、および本書第4章参照。
- 50) コミンテルン第3回大会の時期に、楊明齋がイルクーツクに留まっていたことは、抱朴こと秦滌清が、1921年7月16日にイルクーツクで楊明齋に会っている(抱朴「赤俄遊記」『晨报副鐫』1924年8月26日)ことからまちがいない。

- 51) Xenia J. Eudin, Robert C. North, *Soviet Russia and the East, 1920-1927*, Stanford, 1957, pp.139-140, 前掲川端正久『コミンテルンと日本』, 79。
- 52) 余世誠「参加共産国際“三大”的另一名中国共産党人は楊明齋」(『党史研究資料』1984-1), 余世誠・張升善『楊明齋』(中共党史資料出版社, 1988), 17-18, 75, 黃修榮編『蘇聯, 共産国際与中国革命的關係新探』(中共党史出版社, 1995), 123。
- 53) 『張太雷文集(続)』(江蘇人民出版社, 1992), 5頁の記者(馬貴凡)注。
- 54) РГАСПИ, 490/1/208/92.
- 55) 劉仁靜「回憶我參加共産国際第四次代表大会的情況」(『党史研究資料』1981-4)。
- 56) 国民国家の枠組みに拘泥するかかる組織原理は、戦後の国際連合における国家代表権問題のごとき紛糾——国連加盟を認められることがある種の独立や政権の正統性の証明となる——を惹起した組織原理に通底するものでもあろう。
- 57) 「中国共産党加入第三国際決議案」(中央档案馆編『中共中央文件選集』1, 中共中央党校出版社, 1989, 67)。
- 58) 「中国共産党第一個綱領」(前掲『中共中央文件選集』1, 3)は、第1回大会で決議された規約ともいべきもので、その第2条が「コミンテルンに連合する」(漢語表記では「聯合第三国際」と規定している。「連合」と「加入」とでは、ニュアンスに大きな差があるが、中共側が他国の共産党の文書を翻訳したさい、コミンテルンへの「加入」と「連合」をほぼ同義で使用している例があり(詳しくは、蜂屋亮子「中国共産党第一次代表大会文献の重視と、大会会期・代表についての論考」『お茶の水史学』31, 1988参照)、ここでは蜂屋説にならって「加入」と考える。
- 59) コミンテルンの第3回大会と第4回大会の間に、いわゆる「極東諸民族大会」(中国では、「遠東各国共産党及民族革命団体代表大会」と呼ぶ)が、1922年の1月から2月にかけてモスクワ(最終会議のみペトログラード)で開催されている。この大会に参加した中国代表については、楊奎松「遠東各国共産党及民族革命団体代表大会的中国代表問題」(『近代史研究』1994-2)参照。
- 60) コミンテルン第4回大会参加票の中には、陳独秀、劉仁靜、王俊の他に、「Honghong」の署名の票がある(РГАСПИ, 491/1/360/109。「中国共産党の代表」で「キム」の大会出席、10月29日付発行)が、これは張伯簡(別名:紅鴻)のものだと推定される。趙世炎ら旅欧共産主義グループが、謝寿康、張伯簡らをコミンテルン第4回大会に派遣しようとしたことは、趙の李立三らにあてた書簡からうかがえる(「陸鄧(李立三)同志あての書簡(1922年4月25日)」「吳明(陳公培)あての書簡(1922年4月26日)」(『趙世炎選集』四川人民出版社, 1984, 68, 72))。謝は途中でモスクワ行きを取りやめたようで、モスクワには来ていない。モスクワに着いた張伯簡は、中国から陳独秀率いる正式の中国代表がやってきたため、身分をキム大会に出席する中国代表にし、コミンテルン大会も傍聴したということなのだろう。張伯簡出席の背景となった旅欧共産主義グループの動向については、鄭超麟「記尹寬」(『史事與回憶——鄭超麟晚年文選』1, 天地圖書有限公司, 1998, 422-425)が参考になる。
- 61) *Protokoll des Vierten Kongresses der Kommunistischen Internationale: Petrograd-Moskau, vom*

5. November bis 5. Dezember 1922, Hamburg, 1923, S.365.
- 62) 『“二大”和“三大”——中国共产党第二、三次代表大会資料選編』（中国社会科学出版社、1985）が「關於我們党的組織問題（補充報告）」なるタイトルでその漢訳を掲載している文書（128-129頁、露語よりの翻訳とする）こそは、審査委員会の報告のもとになった中共の報告（申告）であり、その中では党員数は「合わせて300人ほど」とされている。なお、前掲『中国共産党組織史資料』第1冊はこれと同じ文書を挙げつつも、その原文書を英文（1922年12月9日の日付）とする（20頁）。コミンテルン文書には、これに該当する文書がある（РГАСПИ, 514/1/16/28-29）。
- 63) 「中共中央執行委員會書記陳独秀給共産國際的報告（1922年6月30日）」（前掲『中共中央文件選集』1, 47）。
- 64) コミンテルン第4回大会からさらに半年後（1923年6月）に広州で開催された中共の第3回大会では、党員数は420人と報告されている（「陳独秀在中國共産党第三次全國代表大會的報告」前掲『中共中央文件選集』1, 168）ので、コミンテルン第4回大会当時の党員300名という数字は不自然ではない。
- 65) 中共第2回大会（1922年）の「中国共産党章程」には、党費にかんして、月給50元以下の者は毎月1元、50元以上の者は月給の10分の1、月給のない者、および20元未満の労働者は毎月2角、失業状態の労働者と獄中の党員は党費を免除される、という規定がある（同上書、98）。
- 66) 前掲『中国共産党組織史資料』1, 21, 前掲向青『共産國際与中国革命關係論文集』, 327など。
- 67) РГАСПИ, 491/1/343/16.
- 68) 王俊の経歴は中共人名録のたぐいには記載されていないので、不明な点が多いが、種々の間接的資料によれば、長辛店鐵路工廠で働いていた満族の労働者で、五四時期には救国十人団の活動に参加、その後、同工廠のストライキなどを指導したという。かれの党歴を示す資料は残っておらず、劉仁静は、当時の王がカトリックの信者ではあったが、党員だったかどうかは覚えていないと述べている（前掲劉仁静「回憶我參加共産國際第四次代表大會的情況」）。
- 69) РГАСПИ, 491/1/343/18-19, 491/1/360/122-124.
- 70) РГАСПИ, 491/1/353/197. なお、この委任状は英語のタイプ打ちで、「Peking 3/10/22」と「Li ShouChang」の部分のみが手書きである。
- 71) 前掲劉仁静「回憶我參加共産國際第四次代表大會的情況」。
- 72) РГАСПИ, 491/1/350/2. ただし、瞿秋白は中国語—ロシア語の通訳はできたであろうが、日本語ができたとは考えられない。
- 73) РГАСПИ, 491/1/262/28-29. なお、劉仁静の報告は注61の速記録に掲載されており、日本国際問題研究所中国部会編『中国共産党史資料集』1（勁草書房、1970）、186-189、あるいは前掲『共産國際有關中国革命的文献資料』1, 60-63にそれぞれ日本語訳と中国語訳が見える。これにたいするラデク（K. Radek）の批判は、注61のS.627-634、および『共産國際有關中国革命的文献資料』1, 63-65を見よ。

- 74) 黄修棠『共産国際与中国革命関係史』上（中共中央党校出版社，1989），133。
- 75) 文書は、コミンテルン第4回大会関連のフォンドではなく、中国共産党関連のフォンド（514）に収められている（РГАСПИ，514/1/16/1-11，17-21）。陳独秀の二つの報告の内容については、李穎「陳独秀赴俄出席共産国際四大解析——在俄羅斯發現的陳独秀的兩篇報告」（『中共党史研究』2005-3），および李穎『陳独秀与共産国際』（湖南人民出版社，2005），49-54を見よ。
- 76) *Protokoll des Vierten Kongresses der Kommunistischen Internationale: Petrograd-Moskau, vom 5. November bis 5. Dezember 1922*, S.634, 825.
- 77) 前掲劉仁靜「回憶我参加共産国際第四次代表大会的情况」。
- 78) 「コミンテルン執行委員会幹部会の中国問題にかんする会議記録（1922年12月29日）」（前掲BKП(6)〔『聯共（布）……』〕の第52文書）。
- 79) 「中国共産党對於目前實際問題之計畫」と題されている中国語文書（前掲『中共中央文件選集』第1冊，119-125）は、陳独秀がモスクワ滞在中に作成した文書と考えられる。なお、『中共中央文件選集』編者は、同文書の露語稿と英語稿の末尾に「陳独秀1922年11月モスクワ」とあるのを根拠にして、この文書の日付をつけている（Tony Saich, *The Origins of the First United Front in China: The Role of Sneevliet (Alias Maring)*, Leiden, 1991, p.361；李玉貞主編『馬林与第一次国共合作』光明日報出版社，1989，92-97も同様）が、同文書は「コミンテルン第3回，第4回大会は……東方のプロレタリアートにたいして……民主的連合戦線と反帝連合戦線を指示した」（強調引用者）として「東洋問題について的一般テーゼ」（12月5日採択）に言及しているので、実際にはコミンテルン第4回大会の閉幕後、つまり12月以降に書かれたのではないかと推測される。
- 80) マーリンのモスクワ到着日については、「マーリンの旅行費用明細（1920年6月～1922年12月23日）」（Saich, *op.cit.*, 845-847；前掲李玉貞『馬林与第一次国共合作』，104-105）参照。かれらのコミンテルン執行委員会での発言と討議については、前掲BKП(6)（『聯共（布）……』）の第53, 56文書参照。
- 81) 前者はSaich, *op.cit.*, p.377-378；BKП(6)（『聯共（布）……』），第49文書，後者は前掲村田編『コミンテルン資料集』2，373。
- 82) 「マーリンの1922年9月2日から10月13日までの中国における活動報告」（李玉貞『馬林伝』中央編訳出版社，2002，370）。この文書は李氏がガルガスビ文書（РГАСПИ，495/154/133/127-132）を翻訳したものである。
- 83) 前掲劉仁靜「回憶我参加共産国際第四次代表大会的情况」。
- 84) 「訪問劉仁靜先生談話記録」（『党史資料叢刊』1981-4）。
- 85) РГАСПИ，491/1/360/122-124.
- 86) 瞿秋白「赤俄之帰途」（前掲『瞿秋白文集（政治理論編）』1，420；原載は『晨報副刊』1923年1月30日）。また前掲「訪問劉仁靜先生談話記録」も、瞿秋白は「陳独秀と一緒に帰国した」と述べる。
- 87) 「程志孟〔陳独秀〕より孟鄒，原放あての書簡（1923年1月25日）」（汪原放『回憶遼東図書館』学林出版社，1983，89），前掲瞿秋白「赤俄之帰途」（『瞿秋白文集（政治理論

- 編)』1, 423)。
- 88) 前掲「マーリンの1922年9月2日から10月13日までの中国における活動報告」。
- 89) 前掲劉仁静「回憶我參加共產國際第四次代表大会的情況」。
- 90) 蔡和森「關於中国共產党的組織和党内生活向共產國際的報告(1926年2月10日)」(『中央档案館叢刊』1987-2/3)。
- 91) 陳独秀「告全党同志書(1929年12月10日)」(『陳独秀著作選』3, 上海人民出版社, 1993, 102)。